

夏至のころ 6月22日は夏至、星空の世界はもう真夏である。

1938年

## 6月の天象

“しし”は既に西空に移り“をとめ”“まきを”が中天に高く、東の空には美しい銀河を背景とした夏の星座が昇つて来た。懐しい“はくてう”“こと”“わし”“へびつかひ”。“さそり”も上半身を真直に

起して現れてきた。南天には“ヒドラ”の更に南に“センタウル”座に属する星の列びがある。

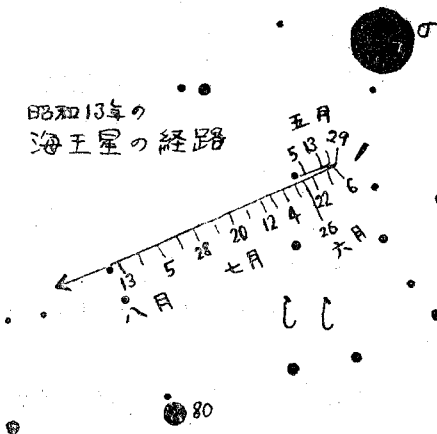
**てんびん座  $\delta$  星** アルゴル型の食変光星。変光範囲が4.8—5.9であつて双眼鏡むきである。6月には14回もの極小期があるが、実際に見られるのは1日23時半、7日23時、14日22時半、21日22時、28日21時半の5回。而も7日と14日は月光に妨げられる。

**いて座  $\nu$  505 星** これもアルゴル型の變光星で週期1.18日、變光範囲6.4—7.5。6月の25回の極小期の中、見られるものは2日1時半、7日23時半、15日1時半、20日24時、28日2時の5回、但し15日には月に妨げられる。強力な双眼鏡ひきは小望遠鏡むき。

**こと座  $\beta$  星** これは食變光星の一代表。週期13日弱。變光範囲は3.4—4.3で肉眼にて観測する。これは毎夜一度宛観測すればよい。

**變光星** 上記の3星は練習用として適當である。アルゴル型ものは極小期の前後數時間にわたつて頻繁に観測する。星圖は倉敷天文臺宛に申込まれたし。(1枚1錢、送料は約20枚まで3錢)

變光星は非常に數が多い爲に観測者が求められてゐる。熱心に永續して観測される方が大に現れてほしいものであ



る。

**キンネケ流星群** “まきを”と“りよう”との境界邊を輻射點とする流星群で6月末から7月初にかけて出現する。但しあまり著しいものではない。1916年には地球の軌道にキンネケ彗星の軌道が最も近づいたので1時間30餘個の出現を見、はじめて注目されたが、彗星軌道が次第に地球軌道より離れて行くため、その後はあまり目立たない。1921年にはこの流星群の觀測のため京都からは勿論、東京からも各地へ出張されたが、中村要氏の微光流星の觀測が目立つた。因に、このキンネケ彗星は明年6月に近日點に同歸する筈である。

**海王星** “しし”座の星の南東を順行してゐる。光度7.7—7.8。

**天王星** “ひつじ”座の中央にあり夜明け前に東に昇るやうになつた。光度6.2。  
この星は秋から初冬にかけてが見頃である。

**木星** “みづがめ”座にある。はじめ順行してゐるが22日に停留し以後逆行する。8月に對衝となるので光度(負2.0から2.2へ)も極視半徑(19秒から21秒へ)も大きくなつて行く。縞の模様は？ 赤斑の動きは？ 問題の遊星は今や觀測季に入つた。

<b>木星衛星相互の食</b> 右表の如く6月1日 の早曉にカリストがユーロパを食 する。	半影に入る	0時16分
	本影に入る	0時22分
	本影を出る	0時29分
	半影を出る	0時35分

**金星** 宵の明星。“ふたご”から“かに”に順行する。光度は負3.4。視半徑は5.9秒から6.8秒に増す。今秋までが觀測の時季である。

**水星** 6月初曉天にあるが次第に太陽に近づき23日に外合、以後宵天にまはる。“ひつじ”座東部から“ふたご”座まで急速に順行する。光度は0級乃至負2級、5月中旬から6月初までの觀測季を逃されぬようお勧めする。

**火星** “ふたご”を順行し29日に水星と極めて接近する(兩星の距離は45分)。太陽と約1時間しか離れてゐず、觀測は出来ない。

**月** 6月は5日に上弦(六分儀座)、13日に満月(蛇遣ひ座)、21日に下弦(魚座)、28日に新月(雙子座)となる。

**太陽** “うし”座より“ふたご”座に入る。まともに強烈な光熱をうけて北半球が喘ぎはじめる。

黒點の極大期に入つて太陽面の動きはいよいよ活潑である。大きな黒點の群を日々注視し記録して行くとき私達は太陽の激しさを身に體驗せざるを得ない。如何したら最も忠實にその模様を把み得るか、録し得るか、これが太陽に對するときの大きな悩みである。(P)

水星の見える頃いつも見たい見たいと思ひながら、蒸氣、雲又は建物等に邪魔されて中々見られないのが、都會の一隅に住む吾々の恒である。

私もこの様な事情で今までに未だ見たことがなかつた。いや見たかつたのだけが見られなかつたのである。昨年末東方極大離角の頃肉眼でみとめ、望遠鏡で見たが位置の關係上よくその形状を見ることが出来なかつた。

全くマキキュリの名に違はず敏捷な運動には驚くが、この水星も遂に觀望することが出来た。

今期東方極大離角も迫つてゐる此頃、もう見える時分と物干臺へ出て西の空を眺めると、今日はまた實によく澄みきつた空である。一點の雲も水蒸氣もなく西の地平線まで、と云ひたいが街に住む私、周圍は屋根ばかりである。その屋根際まで青空が迫つてゐる。太陽既に没して屋根際に金星が巨光をはなつてゐた。尙よくさがすと見える見える金星の上方少し右よりに可愛らしく輝いてゐるのが見えた。早速望遠鏡を出して見ると、なるほど鮮やかに6日月位の形に觀望することが出来た。初め7.5極68倍で觀たが6ミリにパロレンズを付けて200倍以上にして見ると、少し無理だがそれでもあまり形がくづれずに見ることが出来た。

かの有名なコペルニクスでさへ、彼の住居が川岸にあつたため霧に妨げられて遂に一生見ることが出来なかつたと云はれてゐるこの水星が、望遠鏡で都會に住むアマチュアとして、見ることが出来た私は非常に幸福であると思つてゐます。(1938. 3. 31)

## 水星を觀る

(大阪) 青木 章